

第30回 2014年10月22日(水)

ゲスト 山田芳雄 (ラジオ大阪 元編成局長)

森本純弘 (ラジオ大阪 元技術部長)

テーマ “あんさん別れなはれ”

長寿番組 融紅蘭の「悩みの相談室」

主な内容

- ◎産経新聞「悩みに答える」がヒント 融紅蘭の「悩みの相談室」
- ◎長寿番組「悩みの相談室」は生ワイドのコーナー企画からスタート
- ◎“あんさん 別れなはれ” 融紅蘭のひと言で一躍有名に
- ◎電話使って悩み相談 ラジオの特性生かした新機軸
- ◎当時としては珍しい“大阪弁のラジオ放送”
- ◎高聴取率を獲得 OBC が在阪ラジオ3社のトップに
- ◎「蝶々さん どないしょう」 民放連盟賞ラジオ娯楽部門で優秀賞
- ◎藤山寛美が“世相を斬る” ユニークな帯番組
- ◎地域密着コンセプトに番組開発 新人タレントも発掘
- ◎“人間は悩みつつ生きていく生き物” 「相談室」に届いた古い手紙を読んで

司会 西村会長の「蝶々・雄二さん」のお話を伺ってから、あつと言う間の1か月。それから、秋の懇親会でゲストとしてお招きした、宝塚歌劇団の演出家岡田敬二さんがコーラス同好会「コールまかーな」の歌を聞いて、「大変大きくていい声だ」との感想の中でただ1人名前を呼ばれたのが、本日のゲストの山田さんでいらっしゃいます。早稲田大学の先輩後輩とか、そういう関係で褒められたとか、そういうんじゃないんですね。

山田氏 私初めてお会いしました。

司会 岡田さんも早稲田の。

山田氏 ああ、そうですか。

司会 はい、そうです。それくらい印象的だったみたいです。
本日はラジオ大阪OBの山田芳雄さんです。プロフィールを簡単にご紹介いたします。北海道のご出身でいらっしゃいます。1934年生まれ。早稲田の第1文学部のご卒業で、学生時代はアナウンス研究会、アナ研に所属しておられました。アナ研といいますと関西テレビにも何人か卒業生がいて、特に最近では早稲田のアナ研出身のアナウンサーがたくさん出ていて、とても有名ですが、山田さんがいらっしゃった頃はそれほど有名ではなかったんだそうです。放研というのがもう一つあって、このほうが有名だったという風にお話を伺いました。1957年に産経新聞の大阪本社に入社されまして、社会部、それから文化担当の記者をなさいました。翌年の1958年の7月に大阪放送、ラジオ大阪が開局するんですが、全国で39番目、大阪では3番目の民間放送ラジオでした。1380kc、出力3kwという。3kwというと、随分小っちゃい、かわいらしい局ですよ。

山田氏 そうですね。

司会 その開局に当たって、産経新聞から出向されたというのが、この道に入られたきっかけだそうですが、産経の記者として、なにかいろんな記事を書いていこう、社会正義を追及していこう、なんてことをお考えではなかったですか。1年ぐらいでラジオ大阪に行かれましたが。

山田氏 そうですね。

司会 北海道ご出身で、大阪産経に入られたのはどういうきっかけだったんですか。

山田氏 昭和 32 年というのは大変な就職難で、わけてもマスコミ志望者にとっては、狭き門で。私も三つ四つ受けたけど、皆落ちたんです。それで、最後に残ったのが産経新聞大阪本社だったのが、この道に入った訳なんです。これからお話しすることもそうなんです、今から 60 年前の話になりますので記憶が極めて曖昧です。それに加えて、80 歳の声を聞いてからぼつぼつ身辺整理を始めました。終活ですね。

—— 終活ですか。

山田氏 終活を始めておりました。

—— 就職活動ではないですね。

<産経新聞「悩みに答える」がヒント 融紅蘭の「悩みの相談室」>

山田氏 当時の、ラジオ大阪の資料とかその他、一部は OB 会に寄贈したんですが、もうほとんど処分してしまっていて、まさかこんな機会があるとは思わなかったものですから、置いておけば良かったんですが。そんなことで、ちょっと話が曖昧になる部分があるかと存じますが、それはお許しいただくとして。昭和 32 年に産経新聞に入ったときの上司が司馬遼太郎さんでした。文化部の次長でしたね。次長とは名ばかりで、何にも仕事をしない次長さんで、当時から自分の原稿ばかり書いていましたね。机に向かって。そんなことが許された良き時代であったんでしょうね。それで、おそらく今日の本題になる、「悩みの相談室」というのは、実は産経が悩みに答えるという、相談コーナーの紙面がありましてね。今東光さんと融紅鸞さんお二人で担当されていたと思うんです。当時、司馬遼太郎さんの奥さんになる松見（福田）みどりさんという文化部の記者がいたんですが、東大阪の司馬遼太郎記念館の代表者をなさっていました。その方がその悩みの担当者だったんですね。それが、ラジオ大阪が開局するというので、じゃあラジオにと司馬遼太郎夫人からのご紹介を受けたような感じでしたね。

【注】福田みどりさんは 2014 年 11 月 12 日死去（85 歳）

—— 司馬さんが、上司ということで、俺もあんな記者になりたいなんて思っていられなかったんですか。

山田氏 先ほど出野さんにご紹介いただいたように、早稲田のアナウンス研究会というのが、私が入る 2 年前に出来て、私自身、別にアナウンサー志望でもなんでもなか

ったんですが、前身の名前が「テアトルピュール」といって、ラジオドラマの研究會というか、同好會だったんですね。それが、私が入った年に名前を「アナウンス研究會」という名前になって、ラジオドラマの部門とアナウンサー部門の二本立てでしばらく運営されていたと。そういう時代背景がありました。高校のときからラジオドラマにちょっと凝っておりまして、将来はドラマの演出をやりたいというのが私の本来的な希望だったんですが、第2志望的な新聞記者になったそれが、今度うちラジオ局作るよというような話になったので、一も二もなく手を挙げて応募したような次第です。だから、あんまり新聞記者に未練はなかったんですが、当時の日記を見てみると、やっぱり何か書くことには執念は持っていましたね。

——— そうですか。うんと時代は下がって、今、「NALK」という全国的なボランティア組織があります。松下電気の昔、労働組合の委員長をしておられた高畑敬一さんが立ち上げられた組織なんですけれども、いわゆるボランティアシェアという新しい方法を考えられました。全国組織の情報誌がありまして、その今、編集長をしていらっしゃるところで、また書くことが生きているんですね。

山田氏 そうなんですよ。

——— この組織は、ボランティアをすると、1時間につき、1点のポイントがもらえます。自分が年をとって動けなくなったときに、そのポイントを使って助けてもらうことが出来ます。また、全国組織なので、例えば愛媛にいる両親が、助けが必要になったときは、愛媛拠点をお願いして、面倒を見てもらうことが可能です。ところで、憧れのラジオのほうにいらっしゃいました。当時、発足ということになると、さまざまところからいろんな方がいらっしゃったんですね。どんな世界でしたか。

山田氏 どんなっていてもね、23、24歳のペーパーですからね。言われたままに、ハイハイと動いているだけで、おそらく当時は認識していなかったと思いますが、とにかくいろんな人の寄せ集めであったことは間違いないですね。

——— 書く世界から、放送への世界というのは随分違っていましたか。

山田氏 それは違いましたね。

——— どんな風な印象だったんですか。

山田氏 私を含めて、周り全部素人で、初めて電波に携わった人ばかりですから、技術はどうだったんですか。もちろんその道の玄人はおりましたね。

森本氏 そうですね。私は、4月開局の2か月前に入ったんですが、放送の経験者が一人か二人という。ほとんど素人で。それで4月まで技術は用事がないので、NHKの馬場町に研修に行けと言われてまして約1か月、毎日BKの方に研修に行きました。当時、一生懸命教えていただいて、それでやっと放送はこうしてやるもんだという初歩の初歩を覚えて帰って来て、開局に臨んだと。ですからほとんど素人。放送会社の出身の技術の人は、KBS京都から来た方が一人。それからあとレコード会社から来た人が二人。あとは、新卒もおりましたし、といってもほとんど素人で、てんやわんやの開局前というそんな感じです。

——— だそうです。今日は民放クラブ理事の森本さんにも加わって、様々なサポートをしていただこうということになりました。山田さんが最初に担当された、「悩みの相談室」というのが後々、大変な人気番組になるんですが、このお話を中心にその前後の話をお伺いしようかなと思います。編成局編成部というところに所属されたんですね。

山田氏 制作部だったと。

——— ごめんなさい。編成局制作部。どんなお仕事から始まったんですか。

山田氏 もういきなり「悩みの相談室」担当です。

——— そうなんですか。

<長寿番組「悩みの相談室」は生ワイドのコーナー企画からスタート>

山田氏 当時、関西にお住まいの方で70歳を超えた方ならどなたでも、融紅鸞とおるこうらん(1906~1982年)という名前をご存知だと思います。本職は日本画家なんですが、ラジオ大阪の「悩みの相談室」で一躍有名になったというおばちゃんです。融紅鸞とか「悩みの相談室」なんて聞いたことがないという方、いらっしゃいますか？皆さんご存知ですね。やっぱり70歳超えて、関西にお住まいの方だったら誰でも知っているような番組だったんです。当時、午後4時に「OBC 婦人スコープ」という1時間のワイド番組があって、そこに20分間の「悩みの相談室」というコーナーを設けて、聴取者からのハガキや手紙に対して、融紅鸞さんから回答してもらい、録音

した回答を流すというスタイルだったんです。このコーナーを設けたのは、産経新聞が、悩みに答えるという欄を長年掲載していて、そこの回答者として融紅鸞さんがいたので、そのラジオ版ということで、月曜日は例えば、融紅鸞さん、それから火曜日は日赤の木崎先生というお医者さんなど、曜日別担当で6人いらっしやっただと思うんです。名前をすっかり失念しましたがけれども。ラジオの生ワイドの走りですが、そういう1時間番組の中の1コーナーとしてスタートしたというのが、そもそもの出発点です。ありますか、タイムテーブルが。

—— はい。社史をコピーしてきました。夕方4時から、「婦人スコープ①女の生き方②美人を作る方法」とか、「③悩みの相談室」と書いてあります。これは開局の日の新聞のラテ欄なんです。

山田氏 開局の日ですか、わー。

—— 「昭和33年7月1日 ラジオ番組欄。開局当日の放送番組」と、これが社史に載っています。こうして開局当初からワイド番組を始められたんですよね。それから、木崎国嘉さんという名前が出てきましたが、のちのち「11PM」に随分出られていた方ですね。

【注】「悩みの相談室」ラジオ大阪開局の1958（昭和33）年7月1日から
30年近く続いた長寿番組。

山田氏 そうでしたね。

—— 山田さんは「相談室」の担当をされた訳ですが、この番組はそれぞれコーナーによって担当者が別々にいらっしやっただんですか。

山田氏 担当者が別でしたね。

—— おられたんですね。

山田氏 和田貞子というアナウンサーがメインパーソナリティーで、私はその内の一部を担当していたというスタイルだったと思うんです。

司会 和田アナウンサーはまだお元気でいらっしやるという。

山田氏 私よりちょっと上の83歳になる方ですが、実はこの前、出野さんとちょっとお話をしたときかなり私が忘れていた部分があるし、「OBC 婦人スコープ」ってどんな番組だったのと聞かれて、全く私も分からなくて、思い余って彼女に電話を入れたんです。年賀状のやりとりはあったんですけども、電話で話したのはおそらく40年ぶりぐらいだろうと。彼女の旦那さんがNHKの職員で、やっぱり転勤が多くて、彼女もあんまり長いことOBCにいなかったと思います。それで旦那さんの転勤であちこち行って、それに伴ってOBCも退職したというようなことだったんです。電話すると、えらい懐かしがってくれて。「あんた覚えてない？この番組」と言うと、「いや、私も覚えてないけど当時の資料が山ほどあるので、後で捨ててくれていいから、全部送りますわ」と言って、3日ほど前に、ダンボールが届きました。その中にタイムテーブルかなんかがあると、もう少し私にも参考になったなと思うんですが、ほとんど聴取者からの手紙の束でしたね。

——— すごいですね。

山田氏 すごいですね。3円で来ているんですね。1円切手3枚貼って。こんなのですね。

——— よく取っていらっやいましたね。

山田氏 取ってましたね。それで「悩みの相談室」以外に「主婦の作文」というコーナーもあったみたいで、いろんなことを皆さんお書きになっていますけれども。

——— 本当ですね。ちょっと拝見します。いかにも年代を感じさせるような手紙。

(和田さんから送られてきた昭和30年代の「悩み相談」の手紙から)

これは凄い悩みですよ。

「私は19歳の娘でございます。現在、花嫁修業中のため女中をいたしております。

実は初対面の男-----」

これは結構、際どい話があります。(手紙紹介 中略)

資料として保管しておられた和田さんもショッキングな内容なので残されていたのですね。

——— これはいいものが残っておりました。宝物ですね。

山田氏 そうですね。

——— このワイドショーは 1 時間、こんな内容だったようです。さて、この「悩みの相談室」はどんなことで人気が上がってきたんですか。

< “あんさん 別れなはれ” 融紅蘭のひと言で一躍有名に >

山田氏 やっぱり紅鸞さんが真剣に答えてらしたということと、あの喋り方が皆さんにもご記憶があるかと思います。「あんさん、別れなはれ」というフレーズで一躍有名になりましたが、喋り方が大阪弁でアットホームで。当時、大阪の局でありながら、あまり大阪弁を使うという風潮がなかったんですが、今はもう当たり前で、アナウンサーも含めて大阪弁で放送することになんの違和感もありません。ところが当時は大阪弁がラジオから流れるというのが、やっぱり珍しかったんでしょうね。ローカルに根差した地域密着の番組が出来て、悩み自体も、先ほど出野さん、途中で躊躇されましたけれども、かなり際どい内容の相談もあったりして、俗に言えば面白いんですわね。それで一躍、人気が出てきたというようなことでしたね。

——— 月～土で 6 人の方が、いろんな回答者がおられて、中でもやっぱり融紅鸞さんのが・・・。

山田氏 突出していましたね。

——— なるほどね。そんなところからですか。ひとつ、この番組を切り離して独立させようということになったのは。

山田氏 そうなんです。スタートして 1 年ぐらい経って、そこそこ人気も出てきたので、「OBC 婦人スコープ」というワイドの中から独立させて、一つの番組にしようと。その発端は、やっぱり午後 4 時台というのは、主婦が買い物に行く時間だと。もうちょっと主婦が聞きやすい時間帯に移そうということで、午前 11 時からの 20 分番組にしました。そのときに、いつそのこと、電話を使って電話相談にしたらどうだろうかという案が出て、当時はラジオの即時性ということはあるけど言う時代ではなかったんですが、手紙をアナウンサーが読んで、「先生、こんな手紙が来ております。先生はどうお考えですか。どうしたらいいでしょう」とお尋ねするよりは、聴取者の声を生でぶつけて先生と直接、アナウンサーを介さないで、相談者と話をしてもらったらどうだというような案が最終的に採用されたんです。今でこそ電話リクエストだなんだとって、電話を使うのは当たり前の時代ですが、当時は、電話の声を放送に乗せるというのは考えられなかったんです。特に技術の辺りからは、電話というのは C 線っていうんですね。

—— C線っていうんですか。

山田氏 僕も技術的なことは全然知らないんですが、A線というのは、放送に使っているラインなんです。それでC線を、オンエアに使うことはだめだと、技術サイドが猛反対した経緯がありましたけどね。

—— やっぱクオリティーの問題なんでしょうかね。

<電話使って悩み相談 ラジオの特性生かした新機軸>

山田氏 そうでしょうね。音質ですね。要するに綺麗な音質で放送しなければいけないという使命感をやっぱり持っていましたから。そんなことがありましたけれども、一応電話を使った相談というのが誕生しました。

—— もちろん生ってわけにはいきませんよね。

山田氏 そうなんです。

—— そうすると、それを聴取者から来る悩みを電話で聞きながら。最初からもう、融紅鸞さんと生でやり取りをしていたわけですか。

山田氏 いちばん最初は違うよね。

森本氏 そうですね。

—— なんか結構ややこしい。

山田氏 最初は、その辺はちょっと僕も記憶が薄らいでいる部分があります。最終的には、水曜日の夜の6時から8時までの2時間を、相談タイムと決めて、聴取者にPRしたんですよ。この時間、融さんがスタジオにいますから、悩みをお持ちの方、相談したい方、どうぞ電話をかけてくださいと言って、2時間録音を。「こうこうこうだけどどうしたらよろしいでしょう」「そんなら、こないしなはれ」とか「あないしなはれ」とかいうのを最初2時間。最初の頃はね、閑古鳥が鳴いていましたけれど、後になったら2時間、電話鳴りっぱなしなんですよ。

—— そうですよ。そのPRはしたけれど、閑古鳥が鳴いています。これは融紅鸞さん

も本にお書きになっています。「なかなか最初のほうはさっぱりで」って書いてありました。

山田氏 ああ、そうですか。

—— 随分、思惑と違ったみたいですね。

山田氏 最初から不安でしたね。

—— そうですか。

山田氏 そりゃ、PR はしましたが、本当にこんなかけてくるかいなど。

—— なんか奥の手はなかったんですか。

山田氏 奥の手はね。非常にプライベートな話になって恐縮なんですけど、当時、私、来年ぐらい結婚しようかなというような状態にありまして、その企画が果たしてうまくいくかなと彼女に相談したら、私でよかったらサクラでかけてあげるよ」というからね。「頼むわ」言うたら、何のことはない。自分のこと、ぺらぺらぺら喋って。私は副調室で真っ青になったことを覚えていますけどね。

—— なるほど。森本さん、こうやって、録音の方も、技術の方も全部これ、スタンバイするわけですね。

森本氏 そうです。私も随分、長い間やりましたけれども、電話機を2台置いときまして、最初スタジオの中にはつないでいないわけですね。スタジオに、調整室にありますからね。受話器を上げておくわけですね。要するに話し中の状態にしておくわけです。6時になると1台の電話機を置くでしょ。すぐかかってきますから、その電話をスタジオの中につないで、回答していただく。もちろん録音するわけですね。しばらくするとですね、もう1台の電話機の受話器を置くわけですね。そうするとまたかかってきますね。ちょっと話を聞いて、メモを取って、しばらくお待ちくださいということで待ってもらって。前の電話が切れた途端に、また中へつなぐわけですね。そういうことでずっと2時間ですね、連続で録音するわけです。1人がだいたい20分は録らないといかんわけですからね。それを何台かのテレコに、テープをかけて順番に録っていくわけですね。そういう作業をずっとやっていましたね。

—— もちろんアナログですから、それと録音ミスがあってもいけないし、結構、気を遣う2時間だったんですね。

森本氏 気を遣うというよりも、妙に興味津々というか、そんな感じもあったし。世の中に悩んでいる人が非常に多いなという実感ですね。

—— 有名になりました「あんさん」とかは、おそらく大阪の人があまり使わないような大阪弁ですよ。

山田氏 そうですね。

—— これは融紅鸞さんのご本によりますと、山田さんが大阪弁でという風におっしゃったと書いてありますけれども。

<当時としては珍しい“大阪弁のラジオ放送”>

山田氏 もちろん先ほども申しましたように、産経新聞の悩みに答えるという欄の回答も大阪弁で書かれているんですね。だから私も「ぜひ先生、大阪弁をお願いします」と言うと、「私は、大阪弁以外は喋れません。言われなくても大阪弁になります」とおっしゃるんです。初めて先生のお宅へ出演交渉に行ったときのことは、今でも鮮明に覚えているんですが。先生のお宅は阪急の石橋の駅から徒歩3分ぐらいなんですけどね。その真下に箕面川が流れているんですね。それでそのせせらぎを遡って行きますと、私、当時、桜井に住んでたんですが、桜井の辺りには蝶々さんの家があって。彼女の番組も長いこと担当していたので、蝶々さんのお宅にもお邪魔していたんです。融先生のお宅は、その川のせせらぎが本当に目の前に綺麗に流れているのを僕は今でも思い出しますが。その応接間で先生に「なんとかひとつ出演してください」と、あるいは「今度は電話でありますからひとつご協力ください」とかいうことでお邪魔をした、あの石橋のお宅の佇まいが今でも目に焼き付いておりますが、本当に大阪の良き時代の良きおばちゃんでしたね。

—— 最初、なかなか電話がかかってくるまででしたが、火が付き出したのはだいたい何か月ぐらい経ってからですか。

山田氏 いや、何か月もかからなかったと思います。

—— おお、そうですか。みんな誰が電話をかけるかなと思って、聞いていたのかもしれない

れませんね。電話で相談するという習慣はなかったけれど、ひとつポンと押されると、どどっときたんでしょうね。

山田氏 そうですね、珍しさもあったんじゃないですか。何と言っても、顔が見えないという、メリットありますよね。

—— 相談する方にとってはね。

山田氏 それと、どんな悩みの相談室に行っても、回答者と直に話が出来なかったんじゃないですか。それがやっぱり良かったのかなと思いますね。

—— それと融紅鸞さんが、かなりの確な回答をされたんじゃないですか。

山田氏 そうなんですよ。画家ですが、非常に頭もシャープで、そういう意味で「そりゃ、あんさん別れなはれ」に代表されるようにズバリと答えを出すという辺りも魅力の一つだったんじゃないですかね。

—— その頃の融紅鸞さんって、だいたいおいくつぐらいだったか覚えていらっしゃいますか。

山田氏 あのね、1905年生まれなので、今生きていたら110歳ぐらいですか。

—— ということは、当時40、50歳ぐらい。

山田氏 そうでしょうね。

—— 画家としてもお仕事がお忙しかった。

山田氏 ご主人が洋画家で、日展の審査員だったり。そこそこ有名な方だったと思います。

—— 悩みの中で、これっていうのは何か覚えていらっしゃいませんか。

山田氏 いや。

—— ディレクターっていうのはあんまり覚えてない。

山田氏 覚えてないな。

—— 山田さんのお仕事は、そうしますと、その中からどの話を使おうというような取舍選択。

山田氏 そうそう。その2時間のテープをいかに1週間分、20分×6日間ですか。どういう風にピックアップして、そのまた1日分をいかに面白く編集するかと。だから編集屋でしたね。

—— なるほどね。

山田氏 だからテープの編集は今でも僕、自信あると思う。

<高聴取率を獲得 OBC が在阪ラジオ3社のトップに>

—— OBCとしては、融紅鸞さんの話のところを看板番組にするつもりだったようですけど。もくろみ通り、看板番組になってきたみたいですね。

山田氏 そうなんですね。圧倒的な高聴取率を獲得しまして。在阪ラジオ3社の中で、平均でもOBCがトップに立ったという時代でもありましたね。

—— 森本さん、電話を受けて、何かあの時代らしいな、というようなエピソードは。

森本氏 電話で悩みの相談をするわけですが、多分、自分の家の電話では喋れないという内容が多かったんじゃないですかね。ですから、電話を録音していると、バックに、車の音が聞こえるんです。

山田氏 公衆電話やね。

森本氏 かなりの人が、公衆電話でかけてくるんです。主人の話だとか、子供の話だとか、嫁姑の話だとかが多いわけですから自宅からはかけられなかったんでしょうね。録音するとよく分かりますし、非常にリアルな感じですね。そういうことがちょっと記憶にありますね。

—— ということは、もちろん親子3世代同居している時代でしょうし、おそらく多くの方が主婦であったり、若い人妻だったりなんかしたんだろうと思いますが、悩みをどんな形で誰に相談しようかというのは結構、それこそ悩みの種だったんで

しょうね。

森本氏 そうですね。

山田氏 だからネタ的には嫁姑の問題、それから男女の問題。これが圧倒的でしたね。

—— なるほどね。そういう意味では、その時代、昭和 30 年代、その時代の背景というのが、なんとなく分かるような感じがします。この番組は結局、いつ頃まで続くことになるのでしょうか。

山田氏 それがね、はっきりと覚えていないんですね。

—— 覚えてない。山田さんが関わられたのは何年ぐらいですか。

山田氏 私は、昭和 38 年に、営業へ行って、制作を離れましたので、皆さんご存知の OBC 角田温美君。彼女が私の後のディレクターでした。それから後、どうしたかはちょっと定かではないですね。

山田氏 記録によると、30 年ぐらい続いたんです。最後の方はね、融さんじゃなしに、いろんな方が回答者で。タイトルは「悩みの相談室」でした。

—— ということは、本当に OBC 開局以来の歴史的な番組ですよ。

森本氏 そうですね。

—— なるほど。その後に、ミヤコ蝶々さんのお仕事になりますかね。これはどういうきっかけで始まったんですか。

<「蝶々さん どないしょう」 民放連盟賞ラジオ娯楽部門で優秀賞>

山田氏 とにかく、公録（公開録音）もんをやろうということで。タイトルが「蝶々さん どないしょう」というんですよ。まさにね。「お前、悩みやったんだから、ついでにやれ」ということで。ステージの上で聴取者が蝶々さんに悩みを打ち明け、答えると。もちろん出演者が蝶々さんですから、そんなシリアスなもんにはなりませんよ。あくまでも、作る側も娯楽番組として位置付けていましたんで。それで、これは娯楽番組とはいいいながら、割合琴線に触れるところもあるというところが評価されたのか、民放連盟賞ラジオ娯楽部門で優秀賞を受賞（1962 年）したりと

か、そういう経緯がありまして、結構、これも聴取率の高い番組になりましたね。

—— なるほど。なんか悩みを一手に引き受けてみたいな。

山田氏 そんな感じでしたね。昭和 30 年ぐらい。

—— これはどんな番組だったんですか。どんな風な内容だったんですか。

山田氏 やっぱり、ステージの上で蝶々さんと 1 対 1 でね。その悩みをどういう形で言うかという、本人が言うとやっぱりシリアスな面もあって、なかなかうまいこといかんだろうからということで。役者三人使って、簡単なドラマをやらせたんです。その悩みをドラマ化し、コントのようなものに仕立てて、会場の方にご紹介すると、そんな感じでしたね。

—— 面白いですね。公開番組ですから結構、いろんなところでおやりになった。

山田氏 そうです。あっちこっちドサ回りしました。

—— 近畿地方一円ですか。

山田氏 そうですね。もううちのサービスエリアの範囲内、だいぶ行きましたね。

—— 蝶々さんですと、融紅鸞さんとはまた違った。

山田氏 皆さんもご存知だと思いますが、蝶々さんも頭の回転の速かった方ですから、面白いというと、語弊がありますけれども、大変ユニークな面白い番組になりましたね。

—— この番組は企画があつて、蝶々さんをお願いしようという話だったんですか。それとも。

山田氏 そうです、企画ありきです。

—— そうですか。それで蝶々さんは、この頃は雄二さんとのコンビではなく、蝶々さん一人で。

山田氏 別れる寸前ぐらいだったかな、私は、その出演交渉の過程はあまり知らないんですが、うちの上層部とコンタクトがあって、それでこの話が実ったようには聞いているんですが。

——— この当時の公開録音というのは、いわゆるラジオの世界では一般的ではあったんですか。

<藤山寛美が“世相を斬る” ユニークな帯番組>

山田氏 ありましたね。私それ以外にも公録で、大久保怜がやっていた、どんな内容だったかな、覚えていない。当時の付き合いとしては大久保怜とか、アコーディオンの斎藤正雄。だから歌の番組だね、マー坊、マー坊とって、関西では、NHKの「のど自慢」のアコーディオンなんかを伴奏していた男。そんな公録ものもありましたし、漫才それ自身の公録も、私、何本か手掛けていました。だから当時のお笑いさんともお付き合いがあって、一番印象に残っているのは、藤山寛美さんなんです。彼と私は帯番組を持ちましたので、公私にわたってお世話になりましたね。

——— それはどんな帯番組だったんですか。

山田氏 朝の、7時台、5分間ぐらいなんですけど、彼が世相を語るんです。だから今日的に言えば、北朝鮮の拉致問題なんていうテーマについて彼がちょっと5分間ぐらい見解を述べるというのが。だから割合お笑いタレントがシリアスな問題にも首突っ込むので、ちょっとユニークだったんじゃないかなかったですかね。そんな番組でしたね。

——— 打ち合わせのときに、そういう話を伺ったので、藤山寛美さんを中心にインターネットを検索したんですが、残念ながら出てきませんでした。

山田氏 出てこなかったですか。

——— でも彼がそういう番組をやっていたというのは非常に珍しいことですよね。これは5分枠で全部事前に録音し、帯でやっておられたのですか。

山田氏 はい、そうです。生ではちょっと危険だから出来なかったですね。

——— もちろんそうですね。こんな風にして、OBCラジオ大阪は開局以来、非常にたくさんの番組を生み出しているんです。そのあたりは、森本さん、小規模局ならで

はの発信の仕方といたしますか、創意工夫とか、どうやってPRをしていくかという
ような、皆さんの非常に大きな努力があったのかなという気がしますけどね。

<地域密着コンセプトに番組開発 新人タレントも発掘>

山田氏 もちろん、われわれ朝日・毎日という先輩局に追いつけ追い越せの目標を持って
いたんですが、ポリシーとしては、地域密着というのがあったと思いますね。

—— 森本さんはどのようにお感じになっていきますか。

森本氏 3KW でね、後発でスタートしているわけですから、何かやらないと、という精神は
あったんですね。それと割合、番組の開発というか、企画の提案というのは非常に
盛んだったような気がしますね。それからもうひとつ、タレントさんの発掘に
熱心で、ラジオ大阪から出て、テレビに出てという落語家さんだとか、漫才さん
とか、タレントさんが大勢いらっしゃる。そういう新しい、まだあまり売れてい
ないようなタレントさんを番組に出して、やっていこうと。これは制作費のこと
もあったんでしょうが、そういう風潮がありましたですね。

山田氏 先ほど申し上げた電話もそうなんです、大阪で初めてとか、日本で初めてとか
ね。サテライトスタジオというのも、うちが初めて阪神百貨店の正面にどーんと、
大阪駅前に作ったり。それから局のコマソンですね。「♪ラジオきくなら ラジオ大
阪」というコマーシャルソングを作りました。

—— もしよろしければ、フルコーラスを。

山田氏 覚えているかな。

—— 「コールまかーな」の一員ですから。

山田氏 さっきの話ですが、私の声が聞こえたと、宝塚の岡田先生がおっしゃったとか。
コーラスで、個人の声が聞こえるのは合唱団としてはあかんのです。

—— ここに楽譜と歌詞があります。これはOBCの25周年の社史ですが。

山田氏 「♪ラジオきくなら ラジオ大阪 おもしろくって たのしくて ラジオ大阪
OBC」こんな歌。

—— 例会で歌っていただいたのは初めてで、ありがとうございます。これは全国初のステーションPRソングなんだそうですね。

山田氏 なんか全国初というのが好きでしたね。

—— 作詞が野坂昭如さん。作曲がいずみたくさん。歌が北野路子さんという方。道路の路と書くんです（ちょっと写真、モノクロで潰れていますけれども）。こんな風なお嬢さんが歌っていたようですね。「ラジオ大阪の歌」。「OBCソング」。放送開始が昭和36年、1961年の1月1日となっております。放送局で初めてのステーションPRソング。ラジオから流れる軽やかなメロディは町の人々に親しまれ、口ずさまれて、聴取率躍進の原動力となったという風には書かれています。本当に様々なことをやっていらっしゃる。これは開局の年の下の欄。本当に米粒大で、森本さんからお借りした社史3種なんですけれども。これぐらいたくさん、年間に番組を作っていらっしゃいます。それから昭和34年、35年。こんな風に字が大きくなってくるのは、かなり後になって。ですから長寿番組といいますか、長く続く番組が出てくると、新しい番組の数も少なくなってくるという勘定なんだろうと思いますが、毎年、本当にたくさんの・・・ええ、昭和39年ぐらいになりますと、肉眼ではっきり見えるくらい、新しい番組としては減ってますので、レギュラー番組というのはかなり定着してきている時代ではないかと感じます。さっきお話に出た、大阪発のサテスタというのが、昭和39年に出来ていますね。サテライトスタジオ。大阪駅前、阪神百貨店サテライトスタジオを開設して、浪花っ子の話題を呼んだ。放送の聖域とも言われた番組の内側をガラス越しとはいえ、披露することはひとつの冒険であり、番組作りにも制約を受けたが、聴取者のラジオへの親近感は大いに高められたと言えるだろう。というようなことが、書いてあります。こんな風にかなり様々な工夫をしながら、OBCはずっとやってこられたんじゃないかなあという気がいたします。この二つの大きい看板番組を担当しておられて、山田さんがお感じになった大きなことってどういうことでしょうか。悩みを持つ人はいつの世も変わらないなという。

< “人間は悩みつつ生きていく生き物” 「相談室」に届いた古い手紙を読んで >

山田氏 この古い手紙を読んでみましてもね、やっぱりいつの世も変わらんという気はしますね。今、実際問題、どうなんでしょうか。最近、私たちの年代だけじゃなくて、若い方も中年の方も、そのときそのときに、人間というのはやっぱり悩みつつ生きていく、そういう生き物ですよ。

—— それと同時にラジオ大阪の開局から携ってこられて、ラジオをずっと作ってこら

れて、そのうち出力も大きくなってきてというような、ラジオの歴史、ラジオ大阪の歴史を振り返ってみて、山田さんご自身の考えはどんな感じですか。

山田氏 やっぱり生活に密着している媒体。今はおそらくテレビのない家庭というのは、ないと思うんですけど。私らの当時は、どこの家庭にもラジオの受信機というのがありました。それが過ぎて、第2のラジオブームと言われたのは、このモータリゼーションの発達でしたね。これで皆さんが車の中でラジオを聞くようになったというのが、またひとつのラジオの歴史の中では大きなエポックだと思いますけど。常にラジオというのは、庶民の生活に密着した媒体であり続けるんだろうと思いますね。私事で恐縮ですが、まだ80歳前の家内の姉が大のラジオファンでね、普通だったらテレビにかじりついている、そういう世代だろうと思うんだけど、実にラジオに親しみを感じて、テレビよりもラジオの方が面白いというような、そんな人も中にはいるんですよ。だから、世はまさに、世を挙げてテレビの時代ですが、ラジオもどっこい生きていくという感じは常にしておりますね。

——— 今、お答えが出たようなものなんですけど、この高齢化社会の中でね、特にテレビを見ていた人たち、高齢者の方々は、見るテレビ番組がなくなったと。いわゆる年寄りの見る番組が極めて少ないというような声をよく聞きますし、この会が発足したのもそのひとつ、原因があったんですけど。山田さんのお答えは、やっぱり「ラジオを聞けばいいでしょう」ということでしょうか。

山田氏 そう一概には言い切れないとは思いますが、ラジオというのは常に庶民と共にあるということは言えるんじゃないかと思いますがね。

——— 「ラジオ深夜便」なんていうのは、お聞きになりますか。

山田氏 今ですか。僕は聞かないですね。

——— あの番組は結構、聴取率が高い。それから、夜寝られないお年寄りの多くの人がそれを聞いているという風潮について、どんな風にお考えになりますか。あれはやっぱり、年寄りには向いている番組だからというお考えでしょうか。

山田氏 そうですね。おっしゃるように、とにかく世を挙げてバラエティーブームですからね、僕ら本当に見たい番組というのは少なくなりましたね。

——— 山田さんはどんなテレビをご覧になられますか

山田氏 ほとんど、ニュースが主体です。それからBSの旅ものとか、そんなのにチャンネルを合わせがちですね。

—— 今日山田さんが関わったラジオのお悩み番組二つについて、お話を伺いました。皆さまにご質問がありましたら、よろしくお願ひいたします。

—— さっき公衆電話が出てきましたが、テレホンカードはないわけでしょう。

—— ないですねえ。

—— 10円玉を落とすんですね。あのカシャカシャという音は録音のときに、どういう風に処理されたのか、そういうものが入るものなのか。

山田氏 入っていましたね。

—— それを編集されたのか。特にA線、C線と言われてね、気にされるとしたら。私は聞いた覚えがないんだけど、その処理はどうされたのかなというのがものすごく気になりました。

森本氏 かなり編集しましたね。あまり気にしなかった。

山田氏 もろに出ていた。

—— でしょうね。それが逆に臨場感があったのかもしれないですね。

—— あの頃は、10円でかけられたんじゃないですか。

—— 千円でもかけられたでしょう。

—— 3分というのはだいぶ後ですね。

山田氏 そうです。

—— 10円が長かったんですよ。

山田氏 だいぶ喋れたんじゃないですか。

—— 10円だと3分ぐらい、通話出来たのでは。

—— 10円で3分というのは、昭和43、4年だと思います。

—— 昭和39年の東京オリンピックのときに、公衆電話は3分10円ではなかった。

山田氏 なかったですよ。

—— もっと長く喋れたんですか。

—— そういうことは、今みたいにカシャカシャとはいかないんですね。

発言者 今はカシャカシャいうけれど、ほとんど公衆電話を使わないし。

森本氏 今、NTTで、昔は電電公社。公社は、電話を放送につなぐのは、法律があつてダメだという時代があつたんですよ。つなぐなという。それをどうやってごまかしていたのか、覚えてはいないんですが。

—— 通信と放送で電波のあれは許可がいるわけですよ。

—— 有線電気通信法か何かがあつて、電線をつないではいけない。直接電気をね。だから後に音響カプラとかいうので、受話器と受話器を合わすわけ。それでつなぐとか、そういうことが行われていた時代だと思います。

森本氏 音が悪いから、直接やりました。今でこそ、各社、皆、半自動的に電話を放送に綺麗に流せるアンプがあるんです。当時は、それは売ってなくて、自社の技術で作ったんです。そのハイブリッドアンプという機械を使って、電話の音が録音できると。あるいは、こちらのマイクの音を相手に返せると。そういう装置ですが、売ってなかったので、「悩み」のために作ったことを覚えていますね。こんなでっかい機械を作って、それで録音していましたね。

—— 提供スポンサーは、最初は1社ですか。

山田氏 1社じゃなかったですね。いいご質問ですが、全然、覚えていませんわ。

—— 僕もトーク番組をかなりやりました。われわれの間ではね、こういう言い方はあまり良くないんですが、「人の悩みは蜜の味」と言ってたんですよ。つまり、悩みの相談というのは、やっぱり融紅鸞の語り、さばき方もすごいけれど、どこかで共感したり、馬鹿なことやってるなという聴取者側の思いがあったり、自分もああいうことを経験したとかいろいろと共感があったりなんかして。そういう意味で、企画段階で悩みというのは大きいテーマだという気がしますね。中島らもさんの朝日新聞かな、悩みの相談も面白かったですが、確かに、融紅鸞さんは強烈でしたね。スポンサーはどこがついていたんですか。

森本氏 ちょっと思い出せないですね。その当時の番組というのは、箱モノで、1社で提供していたと思うんです。

山田氏 当時は箱のつながりです。

森本氏 ですから、共同提供ということはなかったような気がしますね。どこかが提供していたと思います。

—— 我々、OBCを常に聞こうということと言われていました。だから笑福亭仁鶴さんも最初、OBCに出て、ABCのヤンリクもそっちから入ってきたというね。そういう意味では、タレントに関しても、やっぱり思い切った使い方をされていたと思いますね。我々はOBCを聞けと言われていましたよ。

山田氏 そうですか。

—— OBCの経営的な立場というのはどうだったんですか。儲かっていたんですか。

山田氏 当時ですか。聴取率調査でトップを取ってからは、やっぱり営業成績は上がりましたね。それまではちょっと低迷していましたけれども。

—— トップになられたのは何年ですか。

山田氏 昭和36年か37年ぐらいだと思います。

—— どこが今みたいな聴取率を調べていたんですか。

山田氏 電通、朝日、毎日、それにラジオ大阪。4社共同調査と言っていたのかな。

—— 後々に営業に移って、今度は番組を売る立場になったんですね。この「悩み相談」も売られたんですか。覚えていらっしゃるでしょうか。

山田氏 ちょっと記憶にないです。

—— ちょっと余談になりますが、森本さんが持っていたらっしゃる、融紅鸞さんがお書きになったご本のコピーを読ませていただきました。
この方、非常に文章も面白いですし、読みがいがあるのではないかなと思います。

—— ご本人が書かれたのですか。

—— ご本人が書かれています。先ほど、全部捨てられてしまったとおっしゃっていましたが、森本さんはいろんなものを取っていらっしゃいます。この社史も森本さんからお借りしております、25周年、35周年、50周年。いろいろと参考にさせていただきました。多分、ラジオをご担当の方もたくさんいらっしゃると思いますので、何かご質問があればどうぞ。

—— 先ほど、お姉さんがラジオのファンだとおっしゃっていましたが、どんな番組を聞かれているんですかね。

山田氏 浜村淳。彼女のネタは全部そこから仕入れるんです。いろんなことを知っていますわ。そう思って、ラジオは高齢者の中でどっこい生きているなどは思っていますね。何でしたっけ、タイトルは。

—— 「ありがとう浜村淳です」(毎日放送ラジオ)。

—— アナ研で、もちろんラジオのドラマを作って、ラジオのディレクターをやりたいなど思っていたらっしゃっていましたが、ラジオドラマなんて、お作りになる機会はなかったんですか。

山田氏 当時はありましたね。皆さんご存知かどうか分かりませんが、森本薫という大変有名なラジオドラマの作家から非常に影響を受けて、彼の作品を手掛けて、何か、日を過ごした記憶があります。

——— そうですね。そうしますと、大学ときに夢見ていらっしやったラジオドラマだとか、あるいはラジオでディレクターをやろうという夢は、一応、達成されたわけですね。おめでとうございます。

山田氏 ありがとうございます。それでも、産経新聞に入って、司馬遼太郎に出会えたというのも、やっぱり一つの大きな人生の転機だったかなという気もいたしますね。大きい人でしたね、あの人は。

——— そのまま記者生活を送っておられたら、また違った・・・・・・・・。

山田氏 そうですね。

——— 今は、若い人のラジオ離れというのは随分言われていますが、何かアイデアはないですか。

山田氏 いやあ、もうダメですね。

——— 何かご質問がなければ、このあたりで今日は終わらせていただこうと思います。

山田 どうも大変お粗末でございました。

司会 どうもありがとうございました。

以上